
諦観の美姫

白鳥ひな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

諦観の美姫

【Nコード】

N5714P

【作者名】

白鳥ひな

【あらすじ】

メイティアは歴史のある国だった。けれどメイティアは腐敗した。それは隣国・リルヴェアの侵略を許すことになった。メイティア王家唯一の庶出の姫・ツェルリアは死を悟ったが、いきなりリルヴェアの王・ヴィアルスとの結婚を告げられる。しかも妾としてでなく正妃として。なぜかヴィアルスはツェルリアを知っているようで・・・？

プロローグ

メイティアは歴史の深い国だった。

豊かで広大な土地を保有し、民も活気に溢れていた。

それが変わったのは67代目国王ロキルドが王座に就いてからである。

母であるエルリカに甘やかされて育ったロキルドは民を慮る心を持っていなかった。

元々民のことを格下だと軽視していた貴族と毎夜のように舞踏会を開き、贅沢の限りを尽くした。

すると当然、いかに豊かなメイティアといえど財は減る。ロキルドは自らの財産が減っていくことを危惧した。

真っ先に標的になったのは、民だ。

ロキルドは“搾り取れるだけ搾り取れ”と命令した。

民は混乱した。抵抗もした。いきなり税が何倍にも跳ね上げられたのだから。

しかし相手は王や貴族、つまり国だ。武力を持たない民の小さな抵抗など痛手にはなり得ない。実際、多少文句を言うだけでほとんど実害はないのだ。いままで平和に暮らしてきたメイティアの民には力に力で対抗しようという考えすらないのだから。

しかし、ロキルドは不満を口にした民を不敬罪と称して捕らえ、例外なく処刑した。しかも見せしめとして広場でその様子を公開して。

そんなことが続けば民は嫌でも口を噤まざるを得ない。捕らえられれば弁解の場も裁きの場も与えられず、処刑されるのだから。

民からの人望が厚かった良心のある貴族の青年が「なぜ、あの程度の罪で処刑なさるのか!」とロキルドに異議を申し立てたという。王は一言「目障りだから」と答えたそうだ。その後その青年を見かけた者はいない。

こうしてメイティアはたった3年で腐敗し、疲労していった。それが他国の侵略を許すことになるうとも知らずに。

メイティアの滅び

メイティアの王宮は大騒ぎになっていた。

隣国・リルヴェアの兵が攻め込んできたのである。その勢いは凄まじく、あと半日もしないうちに王都も制圧されるだろう。

メイティアの土地は広大だ。通常ならリルヴェアからどんなに急いだとしても王都に着くまでに10日はかかる。明らかに情報が遅れていた。

「ツエルリア様！リルヴェアの兵がすぐ近くまで来ています！！」
ツエルリア・フォミーユ・メイティアは王女だ。ただし、庶出である。

そもそもメイティアでは一夫一婦制が基本である。それは王族でも変わらない。

しかしツエルリアは現王ロキルドの一夜の過ちあやまちによって生まれてしまった王女だった。

ツエルリアの母は美しい女性だったが、女中として働いていた身分の低い家系であった。そのため、ツエルリアを身ごもり特例として側室に迎えられた後も周囲の態度は冷たく、ついに5年前に精神的な疲労で倒れ、帰らぬ人となった。

つまりツエルリアに後ろ盾はない。王女と認められたのはロキルドの単なる気まぐれであるし、いまでも追い出されていないのは彼女が異母姉妹よりも格段に美しく育ったからである。

美しい姫は外交においてカードとなる。他国との繋がりを手っ取り早く強めるために自国の姫と結婚させるのは定石きまりごとなのだ。

よってツエルリアは完璧に近い王族としての教養を身につけているが、与えられている部屋は城の最端であるし、調度品も王城のものとは思えないほど質素だ。侍女もいま騒いでいるシュリしかない。

「シュリ、おちついて。騒いでも事態は改善しないわ」

ツエルリアは静かに、笑みさえ浮かべてシュリを宥めた。シュリは主人が殊の外おちついているので少し平常心を取り戻したようだ。「ですが、なぜ攻め込まれているという情報がいままで入ってこなかったのでしょうか？城の皆も首を傾げています」

「あら。そうなの？簡単なことよ」

曰く、現在国民は疲弊しており、抵抗できるだけの余力がないこと。

またリルヴェアの兵は民に対して略奪などを行わず紳士的な態度で接することでも有名であり、おそらく誰も暴君たちのために危険を冒してまで報告をしようと思わなかったのだろう。

そして疲れきっている民といくじのない貴族の若者で形成されたメイティア軍が精鋭揃いのリルヴェア軍に敵うはずがない。

「ね、簡単でしょう？」

ツエルリアは苦笑いを浮かべる。

シュリは呆気にとられて固まっていたが、ハツとしたように青ざめた。

「ツエルリア様！でしたら早く王都を離れませんか・・・！」

リルヴェアは民や良心的な支配者には寛大だが、暴君たちには厳しすぎるほどに厳しい。

王家の人間が全員処刑された、というのも珍しい話ではない。

「無理よ。おとなしくしていきましょう」

「な、なぜですか!？」

「逃げ切れないことがわかってるのだからおとなしくしていたほうがいいわ。心配しなくても大丈夫。だからシュリ、お茶にしましょう?」

「・・・はい」

ツエルリアは常に冷静だ。人生を諦観しているのだ。
だからこそ物事を見極めることに長けており、けれど一切の期待を持っていない。

シュリは願う。

どうかリルヴェアが主人にとって楽園であるように。

主人の傷つき閉ざした心を溶かしてくれるように。

(ツエルリア様は十分すぎるほどに傷ついたわ。もう、幸せになってもいいはずよ)

その9時間後。城にはもうツエルリアとシュリしか残ってはいないというとき。

キィッと丁寧な動作で扉が開かれた。

入ってきた兵たちはごく普通におしゃべりをしていた彼女たちに一瞬目を丸くしたが、その中の1人が前に進み出た。

「私は第二部隊長・クラウド。貴女方の名前をお聞かせ願いたい」

ツエルリアは極上の微笑を浮かべた。それは恐れも嘆きも悲しみも伺えない綺麗な笑顔。

「わたくしはツエルリア・フォミーユ・メイティア。この国の第三

王女です」

メイティアの滅び（後書き）

読みにくくてすみません（汗）
努力します。

次話からは会話を増やせるように

リルヴェアにて

ツエルリアとシュリは比較的丁重にリルヴェアの王城まで馬車で運ばれ、部屋に通された。

もちろん窓には鉄格子がはめられているし、扉も鍵はかかっていないものの外に数名の兵が待機している。

しかし調度品は粗悪というわけではなく、捕虜の待遇としては破格だろう。

元々自由な外出など認められていなかったツエルリアにとって特になることなく、シュリと共にいつもどおりの生活を送っていた。

「あら？シュリ、何か聞こえるわ」

「本当ですね。言い争っているようですけど・・・」

そのとき、扉が少々乱暴に開けられる。

「放しなさい！わたくしを誰だと思っているの。この、無礼者！！」
「・・・エリーナ姉様」
「誰かと思えばツエルリアじゃない。気安く名前を呼ばないでくださる？汚らしい」

人一倍自尊心の高いエリーナはリルヴェアの兵に対してあらゆる侮辱をしたのだろう。エリーナを連れてきた者たちは一様に苛立っているようだった。彼らはツエルリアを連れてきた第二部隊だった。

「ツエルリア姫。この方は本当にメイティアの第二王女、エリーナ姫なのですか？」

「はい。クラウドさん。間違いありません」

「そうですか・・・。すみません。あまりにも一国の王女としては

お粗末だったもので」

「なんですって！？わたくしのどこが粗末だというの！粗末なのはツエルリアの方でしょう！！　ああ、わかったわ。ツエルリア、あなたリルヴェアに取り入ったのね。流石はあの女の娘だわ！」

クラウドはさらに言い募るエリーナを一瞥いちべつしたため息をついた。

「エリーナ姫は錯乱しておられるようだ。地下に閉じ込めておけ」「御意」

「な、なによ！わたくしはメイティアの王女よ！放しなさい！！」

エリーナが連れていかれるとツエルリアもシュリもホッと胸を撫で下ろした。

「嵐のようだったわ」

ツエルリアの言葉にまだ部屋に残っていた者たちは皆頷うなづいた。

「申し訳ありません。この部屋にエリーナ姫をお連れした後にツエルリア姫にはご同行願う予定だったのですが・・・」

「いいえ。それで、同行というのは？」

「我が主が呼びです」

クラウドの主。その言葉がさす人物は1人しかいない。

「わかりました」

「いけません！ツエルリア様、行けば殺されてしまいます！！」

「シュリ。メイティア王家はその権力と財を享受してきたわ。メイティアに滅びが訪れたのなら殺されるのも勤めでしょう？」

ツエルリアは悟っているのだ。

これまでメイティア家が犯してきた罪を。これから訪れるであろう死を。

ツエルリアだけは、はつきりと知っているのだ。

「ツエルリア様・・・」

シュリは瞳にいまにも溢れそうなほど涙をためている。

「クラウドさんお願いします。ツエルリア様を殺さないでください！」

「それは・・・我が主がお決めになることですので」
その言葉にシュリは泣き崩れてしまった。

「クラウドさん。行きましょう」

「ですが・・・」

「シュリなら大丈夫です。逆に、いまは1人にしてあげた方がいいんですよ」

「・・・では、こちらへ」

「はい」

ツエルリアはやはり、綺麗な笑みを浮かべていた。

けれどツエルリアに限定すれば、心も笑っているというわけではないのだった。

リルヴェアの王

「仰せの通り、ツエルリア姫をお連れしました」
クラウドの声には？偽りのない敬意が感じられた。

（リルヴェアの王は臣下に信頼されているのね。ロキルド父様とは大違い）

メイティアの臣下はロキルドに諂^{へつ}っていたが、隙あらば王座を奪おうともしていた。

大切なのは己の利益のみ、というような者しかいなかったから。

「ごくろうだった。下がっていい」

「御意」

クラウドは出ていってしまった。

他に護衛の兵などは見当たらず、リルヴェアという大国を背負う王にしては少々無用心なのではないかとツエルリアは思う。腕に自信があるのだろうが、あまりにも警備が手薄だ。

（王自らわたくしを処刑するのかしら？）

ツエルリアが不思議に思っていると声がかかった。それは先ほどクラウドに対して発したような威厳のある声ではない。甘く優しい、まるで恋人にでも語りかけるような声。

「予想以上に美しくなったな。ツェリ、俺を覚えているか？」

ツェリ。それはツエルリアにとって“特別”な者だけが呼ぶ、彼女の愛称。

けれど記憶にある限り、その愛称で自分呼んだ人は母を除けば

1人しかない。けれど母もその人も、もうこの世のどこを探しても存在しない。

「その顔では覚えていないようだな。仕方あるまい。会ったのも話したのもただの一度きりだからな」

「申し訳ありません」

彼は仕方がないと言っているが、表情も声も落胆が窺^{うかが}えて悲しげだ。

ツエルリアが誤らなければならぬと感じるほどに。

「いつか思い出してくれればいいさ。これからは一緒に暮らせるのだから焦らなくていい」

「はい。・・・え？」

あまりにもサラリと当たり前のようにヴィアルスが言ったので、ツエルリアは思わず頷いてしまった。

「どういうことですか？」

「ああ。言っていなかったか？ツエリには俺と共にこの国を背負ってもらいたい」

王であるヴィアルスと国を背負う。それは彼の隣に立つということとを意味していて。

「・・・聞いていません。それにヴィアルス陛下にはもうたくさんの御妃様^{おきさき}がいらっしゃるでしょう？メイティアは滅びました。もうわたくしに価値はありませんよ」

リルヴェアはメイティアとは違い、一夫多妻制が認められている。王ならば多くの妃を迎えるのが義務でさえある。

ヴィアルスは呆気^{あつけ}にとられたような顔をしたが、すぐに「そういうことか」と頷^{うなず}いた。

「これは政略結婚ではないし、ツエリを利用するつもりもない。俺

が望んだんだ。ツエリを、正妃に迎えることを」

「・・・・・・正・・・・妃？」

「ああ。ツエリ、俺はお前を愛している」

ツエルリアはほんの少し眉を^{まゆ}顰^{ひそ}めただけだった。
彼女の深紫の瞳は、かすかに揺れていたけれど。

王の部屋にて

ヴィアルスは深いため息をついた。

ツエルリアはクラウドに命じて部屋に戻らせた。表情にはほとんど出ていなかったが明らかに動揺していたので一度落ち着かせたほうがいいと判断したのだ。

「まだ、思い続けているのか・・・」

ヴィアルスはツエルリアの瞳が揺れていた理由を知っていた。普段は完璧に感情を押し殺している彼女が反応を示す事柄は一つしかない。

「ヴィアくんが女の子にふられるなんて珍しいこともあるんだね」

「・・・ラウル。勝手に城内に入ってきて来るなど何度言えばわかるんだ？」

ラウリディル・シーヴァ・リルヴェアはヴィアルスの父のいところである。

人々が彼の特徴を挙げるならば必ず『年齢不詳』で『神出鬼没』だが『息を呑む程美しい』と表現するだろう。

ラウリディルの実際年齢は50歳を過ぎている。しかし外見年齢はどう見ても20代前半で若々しい。

そのためヴィアルスは敬語を使わない、というか使う気になれないのだ。

また、招き入れたつもりもないのに室内に入っており、声をかけられるまで気づかなかつたりするので、なにか後ろ暗いことをしている者はほぼ間違いなく弱みを握られている。しかし存在感がないわけではなく、むしろあり過ぎるくらいだ。

銀色のまっすぐな髪は背に届くほど長いが結われておらず、それがさらに色気を溢れさせている。深紫の瞳は深遠で透き通るような

肌によくあっている。

「そういえば、ラウルはツエリに似ているな。髪の色こそ違うが、瞳の色や肌や髪質はそっくりだ」

ツエルリアの髪は漆黒だが、ラウリデイルと並べば兄妹といわれ
ても真実味がある。

ラウリデイルは一瞬無表情になったが、すぐにいつもの捉え処^{とらえどころ}のない笑顔に戻り、まるで世間の常識を語るかのように言った。

「あたりまえだよ。ぼくとあの子は血が繋がっているからね」

王の部屋にて2

「は・・・？」

ヴィアルスは思わず聞き返した。確かに似ている。似てはいるが、メイティアの王女であるツエルリアとの接点は欠片も見当たらない。「もちろん父親じゃないよ。あの子の父親は正真正銘あのクズだから。残念だけどね」

「ラウル、どういふこか詳しく説明しろ！」

あつさりと部屋を出て行こうとするラウリディルを慌てて引きとめようとするが、間に合わなかった。

「いま言ったこと、あの子には内緒だよ。あの子はなんにも知らないんだから。でもヴィアくん、難易度が高い子を選んだね。君なら選び放題なのに」

最後にクスツと笑いをこぼしてから彼は出て行った。

「チツ！今度見つけたら縛り上げてでも吐かせてやる」

ヴィアルスは恐ろしいことをサラリと呟いたのだった。

ラウリディルの去った後、ヴィアルスは執務室で莫大な量の書類を捌いていた。^{さば}今後メイティアを復興させるために早急に仕上げなければならぬ書類だ。

それらがほとんど片付いたのを見計らったかのように扉がノックされ、クラウドの入室の許可を求める声が聞こえた。

「失礼いたします」

クラウドは律儀に作法どおりの手順を踏み、ヴィアルスに向き直る。

「今夜のお食事はいかがなさいますか？いつものように自室で？それともこちらで召し上がりますか？」

「今日はツェリと食堂で食べようと思っている」

「かしこまりました」

ヴィアルスは基本的に多忙であるため食事はいつも自室か執務室で取っていた。しかもほとんどの場合軽食で済ませてしまうので、今夜はシェフが久々に腕によりをかけるであろう。

「ところで、なぜクラウドが聞きにくる？いつもは侍女が来るだろう？」

「それは我が主が殺気を放ちながら仕事をされていたので皆が怖がってしまい、私に白羽の矢が立ったためです」

「……」

ヴィアルスは言葉に詰まった。ラウリディルが意味深なことを言っただけで立ち去ったため、しばらくは怒りが収まらなかったのだ。

「気に病まれなくとも結構です、我が主。私どもは主を信頼していますから」

「……ああ。皆に感謝していると伝えてくれ」

「御意」

クラウドは深々と礼をして退出した。

リルヴェアが大国に成り得た理由は広大な土地でも豊かな資源でも技術力の高さでもなく、代々の国王の人望によるものだ、と、リルヴェアの民は自らの子に語り継ぐのだった。

王の部屋にて2（後書き）

短くてすみません。そしてまったくヒロインを出せなくて申し訳ありません（泣）

これから

「ツエルリア様！よかった。ご無事で、本当によかった！！」

ツエルリアが案内された部屋に入るとシュリが目を腫らし真っ赤に充血させて泣いていた。

そして今も泣き続けている。

先ほどまでは悲しみと恐怖で泣いていた。ツエルリアに気づいた一瞬は泣き止んだのだが、今度は嬉しさと安堵で泣き始めてしまった。

一応ではあるが護衛と監視を行っていた数人の兵士から（「なんとかして下さい！！」）と目で語られたツエルリアは苦笑を浮かべながらもシュリの頭を優しく撫でて言葉をかける。

ツエルリアにはわかった。シュリの顔を見た途端に先ほどまでの動揺が治まり、いつもどおりの自分に帰っていくことが。

「そんなに泣いては涙と声がかれてしまうわ。シュリ、お茶を入れて？ミルクティーが飲みたいの」

「はい」

シュリはまだ目に涙をためてしゃくりあげているが必死に笑顔を作る努力をしているようだ。

「自分のぶんも忘れずにね。一緒に飲みましょう」

「はい、ツエルリア様。よろこんで！」

「ツエルリア様に求婚、ですか・・・？」

甘いミルクティーを飲んだシュリは少し落ち着いたようで、ツエルリアから事情を聞きながら水で冷やされた布で^{めの}目を冷やしている。「そうなの。どうやって断ろうかしら？」

「こ、断るのですか！？」

「ええ。例えそれで処罰されたとしても、断らなければならないわ」
ツエルリアは悩ましげにため息をつく。

「どうして正妃なのかしら？大勢いる妾の中の1人としてなら・・・いいえ。彼がわたくしを、知らなかったなら・・・拒否する理由なんてなかったのに」

（ヴィアルス陛下の知っているわたくしはいまのわたくしではないから。きっとそれはまだあの人が側にいた頃の自分。心から笑ったり、泣いたりしていた“ツェリ”だから）

「それにね。ヴィアルス陛下はおっしゃられたの。“愛している”と、おっしゃられたの」

もらった分だけ返さなければいけないという決まりはないけれど、ツエルリアは決めていた。

もう誰も愛さない。だから、誰からも愛をもらわない。

本当の感情と表情を隠して、逆らわず意見せずただ従順に。他人と接するときは必ず一線を引いた。

その線は例え一国の王であつても越えることはかなわない。

「ですが、それでツエルリア様が殺されてしまったら・・・！」

シュリの顔は一瞬にして青ざめる。例えツエルリアに告げられた愛が本心からのものだったとしても、彼女がそれを拒めば逆上し、腹いせに死刑を命ずるかもしれない。可愛さ余って憎さ百倍というやつだ。

「それは大丈夫だと思つてわ。・・・たぶん」

「た、たぶん・・・？」

シュリでさえツエルリアのこのようなあいまいな言葉を聞いたことがなかった。

「ええ。確証はないわ。でも、なぜかわからないけれど、大丈夫だと思つたの」

ツエルリアの表情は変わらない。けれどシュリには彼女が泣きそ

うに見えた。おそらくそれは間違いではないだろう。

「わからないの。ヴィアルス陛下のことも、彼が何を考えているのかも。それなのに、わからないのに、ヴィアルス陛下を信賴しているわたくしがいる。“あの人”の隣にいたときのような安心感を感じている自分がいるの」

「そ、それは悪いことなのですか？」

シュリは思わず口を開いた。淡々と話しているツエルリアを見ていられなかったのだ。

ツエルリアはシュリを見つめ、自嘲を含んだ笑みを浮かべて言った。

「悪いことよ。だってわたくしが好きになった人はみんな、不幸せになってしまうもの。・・・シュリ、あなたもそうでしょう？」

「ツ・・・!!」

シュリは否定の言葉を告げようとしたが、のどが凍りついたかのように音にならなかった。

訪れた沈黙を破ったのは扉をノックする音だった。見知らぬ侍女は社交的な笑顔で告げる。

「ツエルリア様、お食事の用意が整いました。食堂へご案内いたします。ああ、その前にお召し換えを。陛下がお待ちになっておりますから」

「わかりました。シュリ、見立ててくれるかしら？」

「・・・はい。かしこまりました」

シュリは不安に駆られながらも頷いた。あいまいな言い方だったとはいえ、ツエルリアが“大丈夫”と言ったから。ツエルリアの予想は誰よりも当たっていることを、シュリは知っていた。

会話、食堂にて

信頼のおける侍女にツエリの案内を頼み、俺は一足先に席に着いた。10年以上も会うことを控えていたが、近くにいることがわかつているためか早く顔が見たくて仕方がない。

控えめなノックの後、静かに扉が開かれた。

「失礼いたします」

ツエリは微笑みながらドレスの裾を少し持ち上げ、非の打ち所のない礼をした。明らかに外行きの振る舞いだ。部屋に入った瞬間、素早く目だけで侍女たちの存在を確認していたのが見えた。

ツエリは俺に歩み寄り、もう一度深く礼をとる。

「今宵はディナーにお誘いくださり恐悦至極にございます」

「・・・かしこまらなくてもいい」

「いいえ。陛下とのお食事なのでから最低限の礼儀はわきまえないくはなりません」

思わず笑みが漏れる。ツエリと初めて出会ったときの会話を思い出したからだ。

『はじめまして、ヴィアルス王子。わたくしは第三王女のツエルリアと申します。お目にかかれるとは光栄の極み。是非これからもメイティアと親交を深めてくださいませ』

『・・・そんなにかしこまらなくていいんだけど』

『いいえ。大切な客人に無礼な振る舞いはできません』

俺が13歳のときだからまだツエリは9歳だったはずだ。見た目はさらに幼く見えたのに雰囲気はもう少女ではなく、淑女のものだった。あの時点でツエリの礼や言葉遣いは完璧だった気がする。

「クラウド。侍女たちが料理を運び終えたら人払いをしてくれ」
「かしこまりました」

人がいればツエリはいまの態度を崩さないだろうからな。

人払いが済んだようで部屋は静まり返っている。ツエリに視線を移すと怪訝そうな表情でこちらを見ていた。再開してから作り笑顔と驚愕以外の表情を見るのは初めてだ。できれば本当の笑顔が見たいが、それは高望みしすぎだろう。

「猫をかぶるのをやめたのか？」

「・・・ヴィアルス陛下はわたくしのことを知っているのでしょう。いまさら偽っても意味がありませんから」

「そうか。順序が逆になったが、そのドレスよく似合っている」

そのドレスは薄紫を基調としたもので、ツエリの深紫の瞳がよく映えている。侍女たちが一瞬固まったことに気づいただろうか。美しい、の一言に尽きる。

「ありがとうございます。・・・紫はわたくしの最も好きな色なのですよ」

作り笑顔ではあるがその言葉を発したとき雰囲気が柔らかくなったのがわかった。俺には副声音が聞こえたような気がした。

「・・・ルイゼルに褒められたから、か？」

ルイゼル・ジーク・セイティア。メイティアの貴族セイティア家の四男にして、ツエリ教育係兼護衛を務めていた青年の名。歳は離れていたが俺の友人でもあった人物だ。

思わず零れた言葉だったが瞬時に失敗だったと悟った。ツエリの指先は震えていて、動揺しているのだと誰の目にも明らかだ。

「あ、の人のこと・・・知って・・・」

「・・・ああ、知っている。ツエリの想いも知っているつもりだ」
「でしたらなぜっ！」

そう。ツエリはルイゼルのことが好きだった。もちろん恋愛対象

として。幼いながらも早熟だったツエリの想いは本物で、俺が入りこむ隙はなかった。ルイゼルの死んだ後もそれはまったくいいほど薄れていないようで、知っていながら彼女を正妃として召し上げたことに怒りを感じているのだろう。

それでも。たとえ卑怯な手段だったとしても。

「俺はツエリを愛している。いまはまだルイゼルを想っていてもいい。だが、いずれ必ず落とす。俺が好きだと、愛していると言わせしてみせる」

「な・・・ッ！？わ、わたくしは妃にはなりません！どのようなお咎めも受けましょう。ですからお考え直してください」

ツエリを手放すつもりはない。だが、無理強いすれば彼女は何かしら行動に出るだろう。それだけは避けなければならない。ツエリが本気で逃げようと思えば逃げられてしまうだろうし、あり得ないとは思うが自殺をはかられては困る。

「俺のことを思い出せたなら、考えよう」

「え・・・？」

「俺は昔、ツエリと会っている。そのときのことを思い出せたなら、考えてやると言ったんだ」

ツエリは少し思案するように俯いたが、すぐに顔を上げた。

なぜか俺と視線を合わせようとはしなかったが。

「わかりました。約束ですよ」

「ああ」

「では、わたくしは失礼させていただきます」

あの用心深いツエリが“取りやめる”ではなく“考える”という曖昧な言い方を言及しなかったことに多少不自然さを感じたが、今日は思っていた以上にたくさんの表情が見れたのでとても気分がいい。それにツエリは条件を呑んだのだ。もしかすると俺を思い出してくれるかもしれない。

俺はこれからのことに思いを馳せ、口元に笑みを浮かべたのだった。

会話、食堂にて（後書き）

ヴィアルス視点でした。読んでくださりありがとうございます。

前兆

元来記憶力の良いツエルリアは一度通った道は忘れない。そのため案内がなくとも宛がわれた部屋に帰ることができた。

シユリは前回ののように泣き崩れてはいなかったものの無事に戻ってきたツエルリアにあからさまな安堵の表情を見せた。しかしその直後心配そうな表情に戻る。

「ツエルリア様、お顔が真っ赤ですッ！」

「……え？」

ツエルリアが自分の頬に手を当てると確かに熱い。

「風邪をひかれたのでしょうか……。とにかくお座りください。気分は悪くありませんか？」

「なんとも、ないわ」

気分が悪いわけでも、頭が痛いわけでも、だるさや寒気を感じるわけでもない。

ただ、心臓がいつもより早く強く胸を打っていて体が熱くなるのに嫌にならない。それどころか高揚感のようなものを伴っている。ツエルリアはこの感覚を知っていた。だからこそ、内心酷く混乱していた。

（まさか、ね。きっと久しぶりにあの人の名前を聞いたから思い出してしまっただけ）

ツエルリアは意識して心を落ち着ける。

「もう大丈夫よ」

「本当ですか？確かに顔色は戻ったようですが……」

「ええ」

「念のため、今日はもうお休みになられてください」

過保護なシュリに苦笑が漏れるが言葉に出さない。心配をかけたのは理解していたから。

「わかったわ。おやすみなさい」

「おやすみなさいませ」

シュリは素直に進言を聞き入れたツエルリアに安心し、寝台に入ったのを確認すると部屋を出た。

だから日が沈みきってやっとツエルリアが目を開じたことを知らなかったのだった。

過去のキオク 1

バケツをひっくり返したような激しい大雨が天から降り注いでいる。

メイティアの王宮の最も端にある部屋に齡6歳の少女が一人。唯一外の景色を望むことができるはめ殺しの窓から飽きることなく庭を眺めていた。

その少女は天使のように愛らしい。

静寂を破ったのはノックの音。

「どうぞ」

入ってきたのは18歳ほどの青年。高貴な雰囲気を感じ柔らかな笑顔を浮かべている。

「はじめまして。僕はルイゼル・ジェーク・セイティア。今日から君の教育係に任じられたんだ。よろしくね」

少女は庭から目を離さずに青年に問う。

「セイティア家の方がわたくしの教育係？どういうことですか」

幼いながらも少女は恐ろしいほどに聡明であった。自分の価値がそれほど高いことも、敬われる存在ではないことも理解している。

そんな彼女に四男ではあるが名門セイティア家直系男児のルイゼルが教育係として宛がわれるわけがないのだ。なにか、理由がない限り。

「ああ、それはね。僕が希望したからだよ」

「・・・わたくしが誰かご存知で？」

「メイティア国第三王女のツェルリア・フォミーユ・メイティアだろっつ？」

「・・・そういう意味ではありません。セイティア家にとってわたくしは泥棒猫の娘でしょう？ああ、それとも。隙をみてわたくしに危害を加えようとでも？確かにわたくしは力なき子供ですけど、それほど甘くはありませんよ」

セイティア家は王太子であるロキルドの正妻の実家である。ツエルリアの母はロキルドを寝取ったといわれても仕方のない——実際にわれている——立場なのだ。

「ああ。そういえば叔母上がそんなことを喚き散らしていたね。そうか、君の母親がルセリア殿なんだ？なるほど。会ったことはないけど娘である君がその年でそれほどまでに可愛らしいんだ。きつととても美しい方なんだろうね」

「・・・。冗談、ですよ？」

「いいや。僕そういう事情には疎くてね」

「では、なぜわたくしの教育係などに？」

「理由はいくつかあるんだけど。一番の理由は君の瞳の色が気に入ったから、かな」

「え・・・？」

そのとき初めてルイゼルに深い紫の瞳が向けられた。怪訝そうに向けられたその瞳はルイゼルを捕らえたとともに零れ落ちそうなほど見開かれる。

「そう。その瞳だよ。それは僕の一番好きな色なんだ。やっぱり綺麗だね、姫様」

「・・・呼び方」

「ん？」

「わたくしのこと、姫様などと呼ばないでください・・・」

俯いたツエルリアの声はどこか縋っているように聞こえる。

「・・・いいよ。なんて呼べばいいの？」

「それは・・・」

幽閉されて育ったツエルリアは他人に名前を呼ばれたことがほと

んどなかった。母親にさえ年に数回しか会うことができないのだ。愛称を持たないことに思い当たり、溢れそうになった涙を必死でこらえる。

泣きそうになったのは久しぶりだった。あまり重要とはいえない事柄に対して心が揺れたのは初めてかもしれない。

「ツエリ」

「え．．．？」

「ツエリってというのはどうだろう」

「ツエ、リ？」

「そう。リルヴェアって国にしか咲かない希少な花。君の瞳と同じ深紫色をした可憐な花びらは猛毒にも妙薬にもなる。ぴったりと合わない？」

ツエルリアはルイゼルの言葉を理解すると、頬を薄桃色に染めて微笑んだ。

それはまるで蕾が綻ぶような笑顔で。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。じゃあ次は僕のお願いを聞いてもらおうかな」

「ルイゼル様の、お願い．．．？」

「敬語禁止。敬称もなしだよ」

「．．．．．」

「わかった？」

「え、あ、はい．．．じゃなくて、えっと、うん。よろしくね、ルイ」

「ルイか。うん、合格。よろしく、ツエリ」

ツエルリアとルイゼルは顔を見合わせて笑った。

目があった瞬間に恋に落ちたの。

わたくしが一番幸せだった頃のキオク。
ルイ、あなたが好きだよ。

あなたとの思い出があるから、わたくしは生きていられるの。

心の叫び

ツエルリアの意識が夢から浮上して最初に感じたのは優しく頭を撫でる大きな手だった。

「ルイ……？」

先ほど見た夢のせいだろうか。いつもは呼ばないように心がけている名前が零れ落ちた。

「……すまない」

「ヴィアルス陛下？」

手が止まったことと上から声が聞こえたことで目を開けば、ヴィアルスの悲しげに歪む顔が見えた。

「欲しいものはなんでも与えてやる。美しいドレスでも珍しい宝石でも使えきれないほどの金でも。ツェリが望むのなら俺をルイゼルの代わりにしてもいいし、あいつに似たやつを探して遊び相手として雇ってもいい。だから、泣くな」

ヴィアルスはツエルリアの瞳から流れる雫を優しく拭う。

「え……わたくし、泣いて……？」

ツエルリアはやつと自分が泣いていることに気づいた。自覚をすればさらに涙は溢れ、嗚咽が漏れる。

「う、あ……ルイ、ルイ……ど、して。ひっく、どうして？」

ヴィアルスが包み込むように抱きしめれば、縋りつき、泣き叫ぶそれは普段のツエルリアからは想像もできない姿で、人間らしい姿だった。

「好きなの。ルイが好きなの……！」

「知っている」

「誰よりも、何よりも大切だったの！」

「前に聞いた」

「ルイがいないと寂しくて苦しいの！」

「分かつてる」

「ルイがいない世界なんていらない！」

「死にたいか」

「・・・ルイが生きてって言ったから」

「なら生きる」

「無理だよ・・・助けてよぉ・・・！」

ヴィアルスは腕の中のツエルリアをきつく抱きしめた。

「泣けばいい。あいつのことを忘れてしまっくらいに泣けばいい。
ツェリ、愛している」

「わたくし・・・」

「NOはきかない。その代わり、いつまでも待っていてやる」
「・・・」

「ふっ。明日、取って置き場所に連れて行ってやる。早く俺を思い出してくれよ」

そう言っただけヴィアルスはツエルリアの額にそっとキスを落とした。
ツエルリアは泣き疲れたのかすでにまどろんでいる。

「おやすみ、ツェリ」

「・・・おやすみなさい。———くん」

「！？ ツェリ、いま・・・」

寝ぼけていたのは分かっていた。しかし微笑みながら告げられたのはツエルリアが忘れているはずの名前で。

完全に眠ってしまったツエルリアの髪をすきながら期待に口角を上げる。

「思い出してくれたなら、ルイゼルと渡り合うこともできるはずだ」

ヴィアルスはツエルリアの目を冷やしてから、その寝顔を存分に堪能したのだった。

不穏な影

暗い森の中、豪華絢爛なドレスを身に纏った女性がいた。

「まったく、なんであの子だけが庇護されるのかしらあ。許せなあい」

厚い化粧を施したその顔は負の感情に歪められ醜悪に映る。

その顔はリルヴェアの王宮を見つめている。

「エリザベス様！こんなところにおいては危険です。食事をご用意しております。どうぞこちらへ」

「あ、アルバートだあ。心配かけちゃってごめんねえ」

「お気になさらずに。貴女にならどんな迷惑をかけられても……いえ、そもそも迷惑だとすら思いません」

「アルバートったらあ。リジー嬉しい！！」

先ほどの醜い顔など想像もでなくらい華やいだ笑顔を浮かべたエリザベス。

エリザベス・レジーナ・メイティア。つい最近滅んだ王国の第一王位継承者であつた女性であり、現在は数名の元貴族の嫡子たちと共にリルヴェアから指名手配を受けている。

その元貴族の嫡子の1人がアルバートである。

エリザベスと共にメイティアから逃走した男たちは彼女を盲目的に溺愛していることでも有名だ。

「……ねえ、アル。リジーお願いがあるのあ」

エリザベスが頼みごとをするときは相手の愛称を呼ぶ。

そのクセを承知しているアルバートはそれが何にも変えがたい至福だとも言つように、彼女が望む言葉を返す。

「なんなりと申し付けてください。我が君……リジー」

「ありがとお。大好きだよあ」

「ありがたきお言葉・・・」

「あのねえ・・・」

アルバートはエリザベスの言葉に目を見開くが、上目遣いで自分を見上げる愛しい姫に慌てて“是”を返したのだった。

気だるい朝

「ん・・・？」

その日の目覚めはいつもとは違った。

まず、目蓋が重い。そしてうまく頭が回らないうえに頭痛がした。さらには少し体がだるい。

起き上がって閉じられていたカーテンを開けるとすでに陽が昇っていた。つまりは寝過ごしたようで、体のだるさは寝すぎによるものだと思い当たる。

そこまで考えて、やっと昨日のことを思い出した。

「わたくし・・・」

いくら夢を見たからといって、酷い失態をおかしたようだ。ツエルリアは思わず自嘲を零した。

「ツエルリア様・・・？」

「シユリ？」

「申し訳ありません。ノックはしたのですけど・・・」

「ごめんなさい。考え事をしていたから」

最近の自分はなにかおかしいとツエルリアは感じていた。少し前までの自分なら寝過ごすなんてことはあり得なかったし、考え事をしているも——たとえ眠っていたとしてもノックの音に気づかないはずがなかったのだから。

「陛下が、もしツエルリア様が起きていたなら連れてくるようにと・・・どうなさいますか？」

暗に“まだ眠っていた”ということにしておいてもいい、と言うシユリにツエルリアは首を振る。

「服を準備してくれるかしら」

「わかりました。少しお待ちくださいね」

「ええ」

警戒心が薄くなっている。それは確実にいまのぬるま湯のような生活の影響だ。

それは幸せなことなのだろうけれど・・・。

喜怒哀楽の感情が混ぜ合わさったような気持ちからツェルリアは目をそらした。

小さな約束

「ツェリ、大丈夫か？」

指定された談話室に入室したツェルリアにかけられた第一声。

昨日の泣き喚いたことを言っているのだと気づき羞恥にかられて赤面する。

「大丈夫そうだな」

ツェルリアがなにも言えないでいると、微笑みながらヴィアルスは言った。

さらに恥ずかしくなってきたツェルリアは話を変えようと思考する。

「あの・・・今日はどうして・・・」

「昨日約束しただろう？取って置きの場所に連れて行くと」

「えっと・・・」

昨日の記憶を手繰り寄せる。言われてみれば、うとうとしていたときにそんな感じのことを言われたような気がする。

「思い出したか？」

「あ、はい。かすかにですけど・・・」

「十分だ。・・・ところで、昨日俺を呼んだことを覚えているか？」

「呼んだ・・・？」

「いや、覚えてないならいいんだ。気にしないでくれ」

そう言いながらもどこか残念そうなヴィアルスにツェルリアは首を傾げる。

その反応にヴィアルスは苦笑するが結局なにも言わなかった。

「そろそろ行こう。少し馬車で揺られることになるが我慢してくれ」

「おかまいなく。わたくしは大丈夫ですから」

「心強いな。・・・ツェリ。手を」

「・・・はい。ヴィアルス陛下」

ヴィアルスの差し出した手を取り、歩き始める。
王にエスコートされ、姫君は馬車に乗り込んだ。

小さな約束（後書き）

久しぶりの更新です。もし待っていてくださった方がいらっしやっ
たらすみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5714p/>

諦観の美姫

2011年12月3日18時35分発行